

を、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。」

歌は心を種としてうたうものであり、そして歌こそは人の心の糧であり、燈であり、杖であり、友である。戦争によって数知れぬ命が失われ、命を失わないまでも負傷し、身体に障害を負ってしまうものが後を絶たない。信綱は傷痍軍人たちを前にあらためて歌の原点に立ち返り、歌の力を頼んだのであろう。

人の心を種とする古今集以来の歌の伝統は信綱に「述懐・述志」の歌をも選ばせている。

・静かなる夜のふけゆくに点字打つ力をこめて再起へとうつ

・ふと思ふ我が名書けずになりてより幾月ならむ文字のかきたし

陸軍一等兵 西塔高記

・うつし身の光は国に捧ぐれど心の歌をうたはん吾は
・去り行きし昔は花にたとふべし今の希望よ実としならなむ

陸軍一等兵 山崎金次郎

再起へ向けての願望と希望をうたった歌だ。こうした歌にこそ信綱は「心の糧」「心の燈」「心の杖」「心の友」「心の慰藉」ともなる歌の力を見たのだろう。

五、物のあはれ

信綱は「心月集」の歌の評釈でたびたび「物のあはれ」という言葉を用いている。師と仰いだ本居宣長の言葉である。傷痍軍人の作品から信綱が「物のあはれ」という視点で選んだ歌はたとえば次のようなものであるか。

・黒眼鏡とれとて吾兒は人形を盲ひの吾に見させむとする
・我的手に小さくのりてふるへつつ爪たててゐるかなし小兎

陸軍曹長 山本卯吉

・とこやみの中にはほのぼの明けそめて心よ常にたのしかるべし

「物のあはれ」について深く踏み込んで論じる余裕はないが、傷痍軍人たちの歌を受け止め、それを短歌の歴史や伝統の中に組み入れるのに、信綱が歌に対する信念や知識のすべてをもって当たっている姿が眼に浮かぶ。

六、まとめ

戦後、戦中に詠まれた兵士の歌は木俣修によつて「無名戦士の歌」として現代短歌史に位置を与えられた。たとえば木俣は『昭和短歌史』でこれらの戦場詠を「人間のこえ」「真実の叫び」といったやや紋切り型の言葉で賞賛し、返す刀で歌壇の重鎮たちの「翼賛短歌」を批判した。そのやり玉にあがった一人が佐佐木信綱である。しかし、同時代の兵士の歌に対してどちらが真摯に、かつ明確な文学意識をもって全身全霊で向き合っていたのだろう。戦後七十年を迎える今日、そんな単純な疑問が私の心にはある。